

■ 米インフレ指標の発表後も「データ次第」は続く…

前回更新分の本欄で想定したとおり、先週3日にドル／円は6月高値から7月安値までの下げに対する78.6%（黄金比率61.8%の平方根）戻しの水準（143.89円処）まで値を戻したところで上げ渋り、反落して一旦は一目均衡表の日足「雲」のなかに再び潜り込む動きとなった（下図参照）。



しかし、足元では再び143円台後半の水準まで浮上してきており、本日（10日）中に先週3日の直近高値を上抜ける可能性も否定できなくなっている。

この一週間で、下向きだった21日移動平均線（21日線）が上向きに転じ、89日移動平均線（89日線）とともに強気のシグナルを発している点も見逃せない。

既知のとおり、本日は7月の米消費者物価指数（CPI）の発表を控えており、仮に予想を上回る強い結果となれば、直近高値を上抜けてから6月高値＝145,70円を意識した動きになっていく可能性もあると見られる。

市場からは「前月（6月）に引き続きインフレの鈍化を示唆する内容が見込まれる」との声も聞かれるが、それにしては発表前の基調がやけに強いようにも思われる。もともと、6月に発現した「ベース効果」との兼ね合いから、7月の「総合指数」は強めに出ると予想されており、やや強めの結果が出てもらってサプライズはない。

それにも拘らず、今まさに直近高値を上方ブレイクせんとしている様からは、市場における「インフレ高止まり観測」の粘り強さのようなものも感じられる。

むろん、仮に予想を下回るCPIの結果が出れば、結構強めのマイナスインパクトがドル売り優勢のムードを醸すこととなるだろう。どのみち、重要指標の発表に対してはできる限り予断を持たずに臨みたいところであり、とくに“ベース効果云々”が取り沙汰されているような（出てきた結果に対して市場の理解や判断が分かれやすい）局面では、極力控えめなポジションに抑えておくことを心掛けたい。

なお、明日（11日）は7月の米生産者物価指数（PPI）の発表も控えており、より一層理解や判断が複雑になる。つまるところ「9月も米利上げの可能性はあるのか」を諮るためにもインフレ指標は重要ということになるのだが、次回（9月20－21日）の米連邦公開市場委員会（FOMC）までには、8月の米CPIとPPIの結果も出てくる（9月13－14日）。つまり、まだまだ「データ次第」の状態は続く。

一方、ユーロ／ドルの行方については弱気の見方が日増しに増える状況となっている。8月3日に89日線が位置するところで下値を支えられて一旦下げ渋ったが、その後も上値の重い状態が続いており、あらためて89日線を試す展開となっている。

何より、中国経済の低迷ぶりが次第に目に余るものとなってきていることがマイナスのインパクトとして大きい。ことに、ドイツからの対中国輸出が目に見えて落ち込んでおり、域内景気の先行きにも影を落とす。この先、ユーロ／ドルが89日線をクリアに下抜けてくると、あらためて日足「雲」が意識され、この「雲」を下抜けると、再び7月安値の水準が視野に入ってくることとなろう。

（08月10日 10：10）